

見えない力への設計 石垣の風から学ぶ

渡辺仁史

think the future from



hitoshi watanabe lab.

●卒業生へのアンケートから

●この夏、石垣市でのワークショップで“風”に耳をすました。図面や模型では見えない一瞬の突風、雨が横からも下から吹き込む実感。暮らしの快適さも維持費も変わる。そんな問いを胸に、卒業生たちに「風」体験を尋ねてみた。

●返ってきた回答は、風への意識の豊かな広がりを教えてくれた。沖縄の「ひと月ごとに風に名前がついている」文化への感動。20年以上ヨットに乗る人の「右斜め45°から風を受けて、左斜め45°に進むのが、未だに不思議」という驚き。

「子供が風が好きで、風が強かったり息を吹き掛けると笑う時」の微笑ましさ。

「目に砂が入った時。桜が散るのを見た時。夜風が部屋に入ってきて涼しい時」——日常に宿る風の記憶は、設計者が見落としがちな暮らしの質を左右する要素かもしれない。

●一方、実務現場では風は厳しい現実を突きつける。「建物間の通路部が風の通り道になり、設置した防煙垂れ壁が割れて落ちた」報告。高層建築では「外装ルーバーの音鳴り」「エレベーターシャフト内ドラフト」「圧力差によるドア開閉困難」など、風が建物機能の隅々まで影響を及ぼす。

●興味深いのは、「風の強い地域でBIMの環境シミュレーションを行い、I型壁よりも高額だがより効果の高いL型防風壁を選択した」事例だ。現代技術と経験知の融合した風対策の形と言えるだろう。

●「風が大きいところには何か起こる。けれど、どれも先人たちの知恵で何かしらの対策はある」という回答は重要な視点を示している。「シャッターや窓は耐風圧の仕様でコストが全然違う、上の階ほど高く。日本はどの地域も北西の風が強い傾向があるので開口部の設計には気をつけて」——こうした現場知は教科書では学べない貴重な財産だ。

●若手への“風の現場あるある”「想定外の強風を想定すること」は、風という自然力への謙虚さを表している。石垣で実感した「庇の長さ、格子のピッチ、植栽の密度」への風の影響、「湿った風が設計の勘所をずらす」感覚——その土地固有の風の個性を読み取り、設計に反映させることが求められている。

●「人生向かい風、でも、風があるから時は流れる」——この言葉は風との関係の本質を突いている。風は制約を与えるが、同時にその土地らしさや快適性を生み出す源でもある。図面では表現しきれない風の力を設計に織り込んでいく。現場の知恵と最新技術、経験則と創意工夫を組み合わせながら、風という見えない力との対話を続けること。それが私たちに求められている設計の姿なのかもしれない。



NPOうみもりそら 2025SUMMER プログラム「石垣島の風はどんないる」ワークショップ / 海で五感を使って風を感じている場面